

「文型」をめぐる問題点

蒲谷 宏・北條 淳子・小出美河子
新居田純野・久光 直子・深田 嘉昭

はじめに

「文型」は日本語教育に携わる者にとって極めて馴染みの深いものであり、特に初級段階の教育においては必須の指導項目と考えられることが多い。だれもが「文型」の重要性を認め、いわば日本語教育における「常識」として存在しているものであるとさえ言えよう。

しかしその一方で、実際に教場で「文型」を扱うときに、また「文型集」などを編纂する際に、「文型」に関する様々な問題に直面し、「文型」に対する様々な疑問が浮かんできるということも事実であろう。

そこで、そのような「文型」というものを改めて考えていくために、日本語研究教育センターの「日本語研究講座・特殊研究」において、「文型研究」という講座を設置したわけである。

本稿は、その「特殊研究2」の参加者によって、「文型」をめぐる問題点を検討した結果の報告であるが、「文型」というものを総合的に考察するための第一歩として、「文型」にかかわる様々な問題点の全体像を明らかにすることを意図したものである。

なお、本稿では考察のための方法として「KJ法」を用いた¹⁾。

1) 具体的には、「パルス討論」(Pulse 討論: 自由討論 → ラベル化 → 配置といった手順を何度も繰り返していく会議討論法) → 「多段ピックアップ」(討論の参加者が一人ずつ順番に最も重要だと判断したデータを選んでいくという、データを精選

1 「文型」をめぐる問題点の概要

「文型」に関する問題点として挙げられた 30 の定性的データ²⁾を KJ 法の手法に基づいて整理していった結果、問題点は大きく 4 つのグループ (KJ 法の図解においては「島」という術語で呼ばれる) に収斂することになった。まず、全体を見渡すために、それらの概要とグループ間の関係について述べておくことにする。

4 つのグループは、次のとおりである。

- ① 「文型」というものの本質が明らかになっていない。
- ② 「文型」の習得からだけでは表現行為は成立し得ない。
- ③ 「文型」自体の研究も教育研究も進んでいない。
- ④ 「文型」だけの指導に囚われている。

これをシンボルマーク的に捉えると、次のようになる。

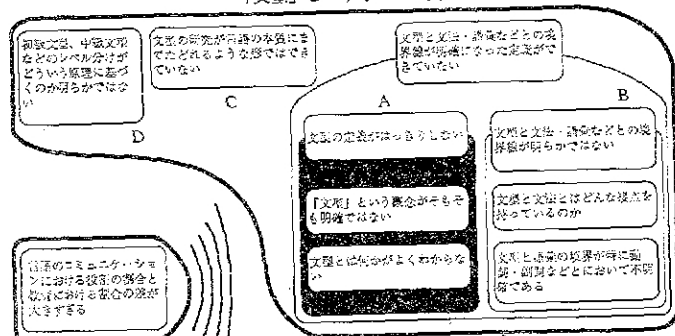
- ① 「本質」の問題
- ② 「表現」の問題
- ③ 「研究」の問題
- ④ 「指導」の問題

するための方法) → 「KJ 法 A 型図解作成」(ラベル化したデータを KJ 法で組み立てた図解。p. 36-37 に掲載) → 「衆目評価」(討論の参加者が各自重要だと判断したデータに点数をつけ、その点数の合計によってデータの重要度を評価するという評価法。今回は各自 5 つのデータを選び、重要な順に 5 点、4 点...1 点をつけていくという 5 点法で評価した) → 「KJ 法 B 型口頭発表」(A 型図解を用いて口頭で説明するという方法。特殊研究合同発表会にて発表) を経て、「KJ 法 B 型文章化」(A 型図解に基づき文章化するという方法。すなわち、本稿のこと) という手順を踏んでいる。KJ 法について詳しくは、川喜田二郎『KJ 法』中央公論社 (1986) を参照されたい。なお KJ 法に関する概要は、蒲谷宏「KJ 法を導入した表現指導」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』1 (1989) を参照。

2) これらのデータは、パルス討論参加者 (筆者 6 名 + 川本喬氏) の内省に基づくものである。なお、これらは多段ピックアップによって 50 のデータから精選されたものである。

文型をめぐる問題点

「文型」というものの本質が明らかになっていない



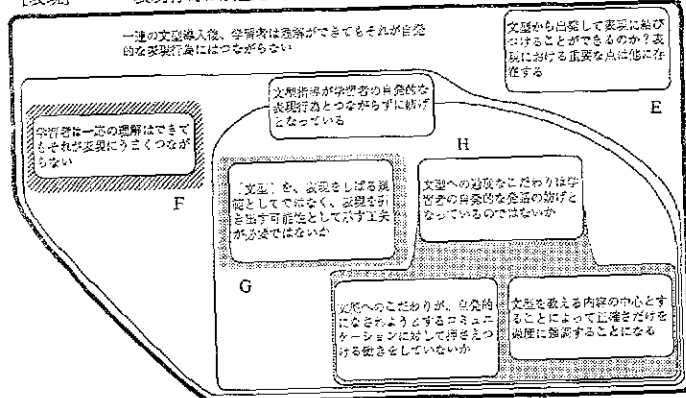
衆目評価

21-25	完全一致
16-20	ほぼ一致
11-15	若干一致
6-10	若干一致
0-5	ほぼ一致

【本質】

【表現】

「文型」の習得からだけでは表現行為は成立し得ない。



1) 1994. 4. 21
~6. 2

衆目評価 (6. 16)

2) 早大日本語研究教育センター
316 研究室

3) 高谷 宏
川本 裕
北條 淳子

小出美河子
新淵田純野
久光 直子
深田 嘉昭

要するに、「文型」というものに関しては、その「本質」・「表現」・「研究」・「指導」における問題点が存するということである。

これらの問題点の関係については次のように整理できよう。

「文型」は、その「本質」も明らかになっていない、それだけでは「表現」行為も成立しない、そして、その「研究」も進んでいない、それにもかかわらず、日本語教育においては、その「指導」に囚われている。

このようにまとめると、「文型」というものをかなり否定的に捉えることになるため、討論の中で、「コミュニケーションを中心とした学習において基本文型の役割はないのか」という疑問も提出された。ただし、本稿においては、あくまで「文型」をめぐる問題点を明らかにすることにその主眼があり、従来の文型指導についての批判をすることが目的なのではない。

またこれとは別の観点から、コミュニケーションにおける言語の役割を過大視することが、教育における文型重視の傾向を生んでいるのではないのか、という趣旨の疑問も出されている。これも今後の検討課題となろう。

本稿において挙げた問題点が果たして本当に問題点といえるものなのか、ということについての検討も今後進めていく必要があるだろうが、以下、①から④までの内容についてさらに詳しく見ていくことにしたい。

2 [本質]の問題: 「文型」というものの本質が明らかになっていない

この章では、「文型」の本質にかかわる問題点を整理していきたい。

2.1 文型と文法・語彙などとの境界線が明確になった定義ができていない

2.1.1 文型の定義がはっきりしていない (A)³⁾

このグループには、次の2つの問題点が含まれる。

3) () 内のアルファベットは、図解中に記したものと対応する。以下同様。

「『文型』という概念がそもそも明確ではない」

「文型とは何かがよくわからない」

このグループは、文型について考える以前に、文型とはそもそも何であるのかが明らかになっていないという問題を指摘している。「文型」という語は、特に言語教育の領域ではなじみ深いものとなっているが、一方で、その定義がかなり曖昧なまま用いられているという現状がある。

本稿では、文型をめぐる問題点が様々な形で提出されるが、いずれの場合にも、文型とは何かが基本的に明らかでないということが大きくかわっていると考えられる。

なお、このグループは衆目評価において最も高い値を示した。

2.1.2 文型と文法・語彙などとの境界線が明らかではない (B)

このグループには、次の2つの問題点が含まれる。

「文型と文法とはどんな接点を持っているのか」

「文型と語彙の境界が、特に動詞・副詞などにおいて不明確である」

このグループは、文型がその他の近接領域とどのような関係にあるのかを問題としている。前者の問題点では、一般に文型としてとりあげられる事項が、いわゆる文法事項とどのような点で区別され、互いにどのような関係にあるのかに疑問を投げかけている。後者の問題点では、一般に文型と呼ばれる事項が、語彙と呼ばれる項目と(特定の品詞において特に)重複することを通じて、文型の領域規定が曖昧であることを指摘した。

文型・文法・語彙のそれぞれの領域でとりあげられる事項は、実際に重複する可能性が十分にある。しかし厳密には、項目の重複すること自体が問題なのではない。大切なのは、ある項目がどの領域に属するのかということよりも、その項目がなぜその領域に含まれるのかということである。文型・文法・語彙それぞれの観点をはっきりと区別することができれば、同一項目が二つ以上の領域に重複してとりあげられても、混乱はないだろう。

2.2 文型の研究が言語の本質にまでたどれるような形ではできていない (C)

この問題点は、文型研究のありかたに疑問を呈したものである。

文型研究とは、ひとまずは文の骨組みを研究することであり、文単位の表現形式を研究することであると言える。特定言語の表現形式を研究することは、その言語の表現特性を明らかにすることにつながり、やがては諸言語の特性を比較する方向に発展する可能性を秘めている。つまり文型研究は、文型だけの研究にとどまらず、言語の特性を考察する観点の一つとも考えられるのである。しかし、現実の文型研究は、言語教育の便宜のために行われている感が強く、言語研究としての方向づけはなされていない。これも、文型とはそもそも何であるのか、文型研究が何を明らかにする作業なのかということが、研究者にはっきりと意識されていないことから生じる問題である。

2.3 初級文型、中級文型などのレベル分けがどういう原理に基づくのか 明らかではない (D)

この問題点は、言語教育における文型指導のありかたについて指摘するものである。

言語教育の現場においては、「文型」を独立した指導項目とし、その内容をいくつかのレベルに分けて示している。しかし、「初級」「中級」などの段階がどのような基準に基づくものであるのか、曖昧であることが多い。「文型」を学習者に提示する順序や文型の難易度を客観的に設定するためには、文型の定義と、教育における文型の位置づけを明らかにする必要がある。

3 〔表現〕の問題：「文型」の習得からだけでは表現行為は成立しえない

日本語教育においては、表現行為を引き出すための大きな柱として、文型練習が導入されている。しかし、学習者の実際の表現行為を考えた場合、文型は必要条件ではあっても、十分条件とはいえず、他の要素が加わ

って初めて、表現行為が成立するのである。そこで、文型と表現行為との関連について、次のようないくつかの問題点があげられる。

3.1 文型から出発して、表現に結びつけることができるのか。表現における重要な点は他に存在する (E)

この問題点は、文型を習得することが表現行為に必ずしもつながらないのではないかということと、文型練習が日本語教育における中心的な項目となるのではなく、単語だけのコミュニケーションなどをも含めて、表現行為を導く手段としては、他にも様々な方法があるのではないかということ提起している。

3.2 一連の文型導入後、学習者は理解できても、それが自発的な表現行為にはつながらない

3.2.1 学習者は一応の理解ができても、それが表現にうまくつながらない (F)

学習者は、ある文型が用いられている文についてその意味・内容を理解することはできても、その文型を学習者自身の表現内容にあわせて活用させることが、たやすくできないということである。

3.2.2 文型指導が、学習者の自発的な表現行為とつながらずに妨げとなっている

3.2.2.1 文型を、表現を縛る規範としてではなく、表現を引き出す可能性として示す工夫が必要ではないか (G)

学習した文型をそのまま使わなければならないような応用の狭い導入の仕方ではなく、様々な状況に即して活用出来るような形で、文型導入に工夫がなされるべきではないか、という問題点である。

3.2.2.2 文型への過度なこだわりは、学習者の自発的な発話の妨げとなっているのではないか (H)

このグループには、次のような二つの問題点が含まれる。

「文型へのこだわりが自発的になされようとするコミュニケーションに対して、押さえつける働きをしていないか」

「文型を、教える内容の中心とすることによって、正確さを過度に強調することになるのではないか」

ここでは、文型指導によって起こる弊害の指摘がなされている。文型練習は、学習者が文を読むときや、発話内容を理解するのにはかなり役立つが、表現するときには、文型だけでは本当に伝えたい表現内容を構成することは難しい。つまり、文型練習が自発的な発話を引き出す役割を十分果たしているとはいえないということである。

学習者は文型という一定の型を学習することにより、その文型に当てはめるような発話に傾くため、学習者自身の表現内容とはかけ離れた発話に陥る可能性があり、さらに、学習した文型を用いての言語形式に縛られ、文型としての正確さにこだわりすぎるため、自由な発話がなされにくくなる可能性もある。また、指導者の文型へのこだわりが学習者の上にも反映されて、学習者自身の自発的な表現行為を無意識のうちに阻止してしまう可能性があるということもいえる。つまり、正しい文型を用いて発言しなくてはならないという考え方を学習者にもたらし、学習者は表現内容を伝えることよりも、言語形式が正確であるかどうかという点に神経を集中をさせることになるのではないかということである。

以上をまとめてみると、日本語指導者、学習者のために組み立てられたはずの文型練習の導入が、学習者の自発的な表現行為を促す役割を果たさず、いつのまにか一人歩きを始めてしまい、そのために文型練習によって培われるはずの自発的な発話が様々な弊害を受けているのが現在の日本語教育の現状ではないだろうかということになる。それ故に、文型導入の原点に立ち返り、もう一度文型というものを考え直してみることが必要であろう。

4 「研究」の問題：「文型」自体の研究も教育研究も進んでいない

現在の日本語教育では「文型」の指導に追われてはいるものの、実は、文型自体の研究、教育研究はあまり進んでいないという問題点も浮かび上

がった。

4.1 文型の自然な用法に関する研究や教育が進んでいない

学習者の学習目的・文化的背景等が異なる中であって、従来の文型にあてはめて文を作るという作業では、できあがった文に自然さを欠くことが多い。これに関連して下記の二つの問題点が指摘された。

なお、これらの項目は〈2.1.1〉に次いで衆目評価で高い価を示した。

4.1.1 文型の分析結果に基づいた自然な表現方法のマニュアルができていない (I)

「文型の分析・記述の結果をどう授業で活用するかが十分に理解されていない」

「文型を用いた表現をさせるための適当なマニュアルができていない」

文型の分析・記述に関する研究はすでに多くなされているが、実際の教育現場でその成果が活用されているとはいえない。これには研究成果を如何に活用するかについての方法論が未熟であることとともに、活用するためのマニュアルが十分に整備されていないという問題点が含まれているものと考えられる。

4.1.2 文型の用法について研究も教育も進んでいない (J)

「文型の用法 / 機能の研究が進んでいないことが問題である」

「文型の中心的用法とは別に実際の場面における用法の適切性をどのように示したら良いか」

これらの指摘は前項よりさらに根元に視点を置いた問題提起である。文型そのものの機能あるいは用法の研究が未だ十分になされていない点と、ある文型の中心的な用法は明らかにすることができても、その文型が多様な状況の下で適切に使われ得るための方法は未だにわかっていないという問題点である。

4.2 文型の「核の意味」をどうとらえるか (K)

これは前項と関連があり、その別な角度からの問題提起である。

4.3 文型間の問題についての研究が進んでいないことが問題である (L)

各文型によって表現できる範囲が規定され、また文型相互の関連性が明確になれば、より少数の文型でより広い範囲の表現が可能になると考えられるが、この点についての研究が進んでいないことが指摘された。

5 (指導)の問題:「文型」だけの指導に囚われている

このグループには、(指導)の名前が表すとおり、現在までの日本語教育における文型偏重、また、文型指導自体に関する問題点が集まっている。

5.1 文型のクラスを独立して設ける意味はどこにあるのか (M)

5.2 文型の指導が“文型だけ”の指導になってしまっている

5.1, 5.2は日本語教育において、文型が重視されすぎている現状を問題視しており、言語教育におけるコミュニケーション能力育成という目標に対して、あくまで形式として正確な日本語を教えようとする現在の日本語教育の問題点を指摘している。

5.2.1 文型と、学習者の表現意図や国民性、文化背景などと関連づけた文型指導が行われていない

5.2.1は文型指導と学習者の表現意図、発想の問題を指摘しており、日本人とは異なった文化的背景を持つ学生を意識しての表現指導が十分に行われていない現状を示している。

5.2.1.1 文型的には正しくても国民性や文化によって引き起こされる誤用をどのように捉えるか (N)

5.2.1.2 表現に込められた意図や文化的背景と、文型を十分に関連づけた指導が行われていない

5.2.1.1, 5.2.1.2は日本文化と学習者の文化との違いが原因となる問題について、前者はその捉え方、後者は文化差を考慮した指導の不足として指摘しており、文の形ばかりが重視され、文の持つ本当の意味を習得できるような指導がなされていないことを問題としている。

5.2.1.2.1 学習者自身の表現意図と日本語の文型を関連づけたかたちでの指導が行われていない (O)

「表現意図と切り離して文型指導が行われることが多いのではないか」

「これを言いたいとき、どんな表現を使うだろうかを母語で説明し、日本語ではこの文型を使ってこう表現するのだという導入の欠如」

このグループは、文型指導において形の導入と練習が中心となり、文型の持つ真の意味が十分に示されず、その結果、形に合わせて文を作り上げることができるようになって、その文の本当の意味を習得できず、自分の言いたいことを十分に表現できる段階まで行かないうちに学習を終了してしまうという、特に初級段階での問題を意識したものと考えられる。

5.2.1.2.2 表現主体の発想や文化的背景を十分に示した文型指導ができていない

『文型』の説明に際し、単語レベルを越えた用法(特に習慣的、文化的なもの)をどのようにして示したら良いのか」

「文を表面からだけ見るのではなく、その文の発想にまで触れないと、文型練習は誤用を生み出す元凶となってしまうのではないか」

このグループは、学習者に対して、実際の生きた表現をするために必要な情報を提示しての文型指導が行われておらず、指導法も確立していないという問題を指摘している。

5.2.2 文型指導に柔軟性がたりない

このグループは学習者のニーズとそれに対する教師の柔軟性の問題を指摘している。

5.2.2.1 文型に誤りがあっても、表現内容が十分示されている場合、正しい文型表現とのギャップをどこまで許容すべきか (Q)

これは正確さと実際の言語運用力の差をどのように捉えたら良いのかという教師の評価における問題を指摘している。

5.2.2.2 学習者に合わせた適切な文型提示と柔軟性のある文型指導がなされていない

5.2.2.2 は画一的な文型指導ではなく、学習者を十分に考えた文型指導の必要を示し、教師が指導する際の柔軟性の問題を指摘している。

5.2.2.2.1 文型提示の順序として、使用頻度や、難易度などの一方向性が、理解・表現につながる良い方法と言えるのだろうか (S)

これは、教師が考える文型提出順が、多様化する日本語学習者の要求を満たしておらず、その結果として、効率的な日本語学習を疎外してしまう可能性があることを示している。

5.2.2.2.2 学習者に合わせた柔軟性のある文型指導がなされていない

「学習者に合わせた教師側の指導上における柔軟性が必要ではないか」

「受講対象者に合わせた文型作り、表現方法が必要ではないか」

ここでは、教師に対して、指導する際に十分に学習者を意識し、学習者にとっての最も良い指導を柔軟に選択することが求められていることを示している。

5.2.3 文型の指導を重視するあまり、自然な日本語を習得するための諸要素を軽視している

このグループでは日本語教育における正確さと、自然さの問題を指摘しており、正確さが重視され、自然さが軽視されてしまう現状を反映していると思われる。また、教師の考える教育内容と、実際に求められている言語能力の違いも指摘しており、現在の日本語能力評価の問題と教師の言語観の問題をも示している。

5.2.3.1 文型を教える内容の中心とすることで、プロソディー等が軽視され、自然な日本語が習得されない (T)

これは、オーディオリンガル以降も文型という言語のパターンが指導内容の中心のままで、そこに入れられる語彙、流暢で自然な発音、場面に合った表現等が重視されないという現状を反映している。

5.2.3.2 教育の場において文型が重視されすぎ、語彙など他の要素が軽視されている (U)

「教師の側に文型以外に何かをつみ上げる発想がない」

これは、最近次々に出版される新しい教科書を見ても、文型をつみ上げるといってほとんど変化していないということを踏まえて出された問題

点である。

「文型中心の指導では語彙の教育が軽視されてしまう」

これは、初級段階でのコミュニケーションには単語力がもつとも必要とされる能力であるにも関わらず、単語の導入、練習よりも文型の教育が重視されるという現状を問題視している。

おわりに

以上「文型」をめぐる問題点について述べてきたわけだが、冒頭にも記したように、本稿はあくまでも「文型」というものを総合的に考察するための前提となるものである。そのため、今後は、まず問題点の①として挙げた「本質の問題」の解明を中心に考察を進め、それとともに、従来の「文型研究」・「文型教育」に対する評価、また「文型」というものの新たな規定などについても検討していきたいと考えている。